

野菜類 アザミウマ類について



図1 ミナミキイロアザミウマ



図2 ミカンキイロアザミウマ



図3 ヒラズハナアザミウマ



図4 葉の食害痕 (トマト)



図5 果実の食害痕 (ナス)

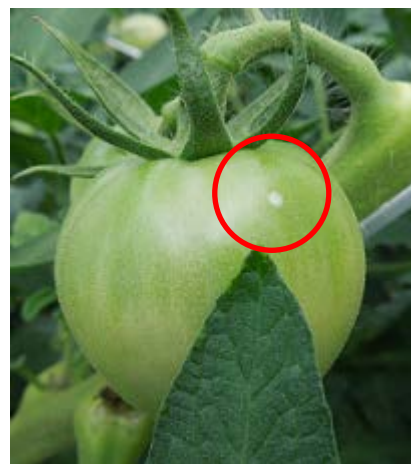


図6 トマトの白ぶくれ (○内)

1 生態

野菜類に被害をおよぼすアザミウマ類は多種いるが、主な寄生種はミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマである。いずれも植物体を吸汁することにより被害を与えるほか、ウイルスを媒介する重要な害虫である。

ミナミキイロアザミウマの成虫は体長約1.3 mm、体色は黄色で背中にはたたまれた翅が黒く筋状にみられる。ミカンキイロアザミウマの成虫は体長約1.5 mm、体色は黄色～褐色、体色には変異があり夏期は黄色、冬期褐色が多くみられる。なお、肉眼での観察は困難だが、複眼後方第4刺毛が長く他種との見分けができる。ヒラズハナアザミウマの成虫は体長約1.5 mm、体色は雌雄で異なり、雌は暗褐色～淡褐色、雄は黄色である。

種によって主な作物や寄生部位は異なるが、成虫および幼虫が新芽や葉、花弁、果実などを加害することにより奇形葉やカスリ状の食害痕を生じる。また、ナスやピーマンではガク下で果実を加害するため、食害痕は果実の肥大とともに大きくケロイド状となる。

トマトではミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマが子房に産卵すると、果実肥大に伴い産卵痕が白くみられいわゆる、白ぶくれ症状となる。

2 発生状況

野外では春から秋にかけて発生が多くなるが、施設内では周年みられる。アザミウマ類の生育は早く、25℃の温度条件では卵から成虫となるまでおよそ14日である。

ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマは露地で越冬できるが、ミナミキイロアザミウマは低温に弱いため、露地では越冬できず、施設内などで越冬していると考えられる。

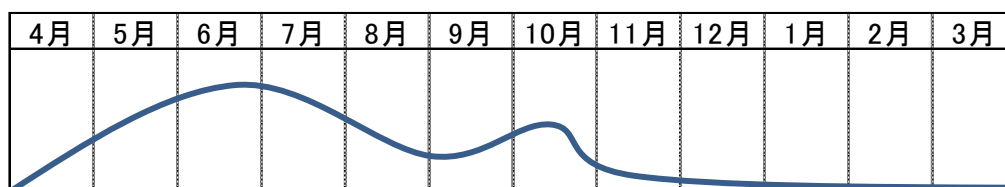


図5 アザミウマ類の発生活消長

3 防除対策

(1) 薬剤による防除

薬剤抵抗性の発達を避けるため、同一系統薬剤の連用を避ける。また、苗からの持ち込みを防ぐため、育苗時も薬剤により防除を徹底し、定植時には粒剤を施用する。

また、アザミウマ類の種類により薬剤効果が異なるため、発生している種類を確認し、防除薬剤を選択する。

(2) 侵入防止対策

施設栽培では、開口部への0.4mm目合い防虫ネット、紫外線除去フィルムの展張や周辺へシルバーマルチを設置し、外部からの侵入を防ぐ。露地栽培ではほ場周辺にソルゴーなどの障壁作物を作付する。

(3) 蒸し込み

施設栽培では、栽培終了後に施設の密閉（蒸し込み）処理を行い、アザミウマ類を死滅させるとともに施設外への離脱を防ぐ。なお、施設内に雑草等が残存していると雑草上で生存するため、必ず除草してから密閉処理を行う。

(4) 除草の徹底

農作物のほか、雑草にも寄生するため、ほ場内および周辺の雑草は除去する。

(5) その他

ウイルス病を媒介するため、低密度であっても保毒虫が存在しているとウイルス病に感染し、大きな被害が発生するため、上記の防除対策を徹底する。